

令和6年度中国・南昌市への青少年訪問団派遣事業 事後報告書

◆名前：吉岡 弘泰

江西省及び南昌市に滞在中の様子や本事業で得たこと、感想等をご記入ください。
(1,000字程度)

今回私は8月18日から24日の日程で高松市青少年団の一員として中国の江西省及び南昌市を訪問しました。この事業の目的は青少年同士の交流を行うことで両市の更なる友好交流の発展に繋げることでした。訪問前の市長表敬の場で両市の友好関係がより発展するように責任ある行動をとり全力を尽くすことを宣誓しましたが、それに見合った行動を取れたと思います。

今回の訪問は素晴らしい体験でした。歌や伝統的な舞踏などを披露してもらった歓迎会や現地の学生と交流しながら有名品である陶器作り体験、沢山の店が立ち並ぶクリエイティブストリートの散策など多くの貴重な体験をしました。これらはすべて高松市の人と現地の人たちが私たち青少年団員のために素晴らしいプログラムを組んでくださったお陰です。本当にありがとうございます。

ここからは私がこの訪問を通じて学んだことを2つ挙げます。

1つ目は、コミュニケーションの中で大切なのは感情を前面に出すということです。私は中学2年の夏にアメリカにホームステイを経験しました。その時の経験上传えたいという強い気持ちさえあれば、言語が違ってボディーランゲージなどでコミュニケーションを取れるものだと思っていました。訪問前、私は中国語の学習をした経験がありませんでしたが、気持ちさえあれば何とかかなと思っていました。実際現地の人とは身振り手振りで一定の意思疎通を図ることはできましたが、うれしい、辛い、おいしいなど自分の感情を言葉で表現しその感情を相手と共有できれば、もっと深い交流ができたのではないかと感じています。思い返せばホームステイの際素晴らしいコミュニケーションがとれていた要因は「Happy」や「Sad」などの感情を言葉にして前面に出していたからだと感じました。これはどんな場面のコミュニケーションにおいても重要なものだと思うので、他言語の勉強を進めたり日常の中で自分の気持ちを積極的に発信していく意識づくりをしたりしていきたいです。

2つ目は、日記を書くことの大切さです。今回の訪問前、自分で日記を書き記録を残そうと決めていました。その日撮った写真などを見返しながら「この時こう思ったな」とかを思い返しながら書きました。たまにその日の内に日記を書くことはできませんでしたが、高松に帰ってくるまでには全日程の日記を残すことができました。今こうやって事後報告書を書く際もう一度見返してみると、帰国してからわずかな時間しか過ぎていないのに忘れていたり懐かしかったりすることが沢山ありました。もし私が日記を残していなかったらそのとき何を感じ何と思ったのかということはいずれ忘れてしまい、せっかくこれほど貴重な体験をしたことがもったいなくなっていたと思います。これは普段の日常も同じで、なんとなく終わった日も特別だった日も過ぎてしまえば忘れていってしまうものです。それを記録として残す意義、大切さに気づくことができました。

今回の訪問に関わったすべての人に素晴らしい体験をさせてもらったことを心から感謝します。